の油いためのの皿や、大きな容器の中で湯気をたてている豚汁、それに牛缶があけられて、馳走の山が盛られていた。祝賀の宴であった。

長い間の従軍で、服は埃と汗にまみれ、髪は伸び、ひげ面に目ばかり光らせた僚友たちが、酒やビールで賑やかに気勢をあげた。長い苛烈な戦いの終わりだった。重傷で後退した牧島を除いては、だれ一人傷一つ負うことなく、元気な顔を揃えていた。銃声や遠方の砲声がきこえてはいたが、もう生命の危険からは解放されていた。平和の和らぎが酒杯の中に宿っている。

近くに宿営した部隊も、祝宴を張ったのだろう。歌声が流れてくる。「露営の歌」であり、「進軍の歌」であった。上海以来、こういう歌を耳にするのははじめてだった。力強く若々しい歌声には解放感があふれ、故郷を恋うるひびきがあった。

食事が済むと、私は無性に眠くなった。昨夜は一睡もしていなかったからだ。私の隣には、同じ社会部仲間の依岡が毛布をかぶった。東京以来久しぶりの会合で依岡はしきりに喋った。しかし私は合槌をうつ間もなく、深い眠りにおちこんでいった。

福日記者の遺骨

十二月十四日、南京占領第一夜が明けた。よく晴れて暖かい。すでに二週間晴天がつづいている。私は写真の高崎、映画の荒木と三人で取材にとびだした。光華門で脇坂聯隊を訪ね、ついで中華門

へ。するとそこに、兵隊の一群の中に白い箱を抱えた二人の従軍記者が歩いている。福岡日日新聞の小沢写真部長と蔵原記者だった。箱は戦死した比山国雄写真部員の遺骨だという。

比山らは郷土の六師団についていた。十二日、雨花台の要害を抜き、中華門への突撃がはじまる時、比山は戦車からとびおりて、その決死隊の出撃の模様にカメラを向けた。その時、城壁から掃射された機銃弾が頭部を貫通したのだ。正午すぎである。しかし決死隊が城壁に日章旗をたてるまでは、敵弾のため比山の身体は収容することができなかった。

やっと戦車が比山を収容したのは二時間後で、後方に運ばれた遺体は、他の戦死者とともに火葬にされた。小沢写真部長が抱いていたのは、福日の社旗で包まれたその遺骨の箱だったのである。高崎と荒木に代わって福日の二人が車に乗った。そして支局に向けて走っていると、年輩の従軍記者が手をあげている。

後部席で、小沢と蔵原が「豊福さんだ」と叫んだ。それは同じ福日の豊福一喜記者であった。豊福は中山門から入城したが、比山戦死の報を聞いて、中華門へ急ぐ途中だったのである。偶然の連続だった。遺骨はその夜、同盟支局の隣室に安置され、翌朝、小沢に抱かれて上海へ帰った。

33名の大陣容

十四日は、各門から入ってきた同盟の記者、カメラ、無電が次々と集まってきた。記者の大鋸時

生、樋口憲吉、小坂武司、加藤松、深沢幹蔵、写真の稲津巳喜二、無電の菊地久太郎、それに古賀、手島、中村などの連絡員らで、臨時支局は三十三名とふくれあがった。他社は十名から十五名のていどだったので、一大陣容となったのだが、これがかえって裏目に出た。

日中は、記者もカメラも取材に出歩いていたので問題はなかったが、夕刻みなが帰ってくると、野戦支局は人間でいっぱいになった。

留守居役を引き受けて設営を受け持っていた依岡が、さらに空室をとりこんで居室を広げてはいたものの、前夜からの先着組がそれぞれの居場所を広げていた。それがあとから到着した者たちの不満を買った。

後着組の殴り込み

十六師団といっしょに中山門から入った先着組は、東京本社からの記者が中心だった。これに対して柳川兵団について南西部の各門から入った後着組は、大阪支社や関門支社などからの記者が中心だった。すでに気心の知れた先着組は前夜同様、この夜も食卓を囲んで賑やかに食事をはじめようとしていた。そこに、後着組が乗り込んできた。この連中はすでに夕刻から別棟で飲みはじめており、すっかりメートルがあがっていた。彼らは中央の私たちとは面識がない。その中央組が野戦支局をわがもの顔に振る舞っていたのが気に入らなかった。

中でも酒豪の樋口憲吉、大鋸時生の両記者は、頑丈な荒武者タイプで、酒気をふりまきながら現れると、食卓のわれわれを睨みまわした。私たちが席をあけて迎えようとすると、いきなり樋口が依岡に詰め寄った。

「お前はいつから支局長になったんか。設営したり、飯をつくったり偉そうな顔をするな」

と言うと、胸倉をつかんだ。

「何をするんだ」

依岡がふりほどいたはずみでドスンと背中を壁に打ちつけた。これで先着組が総立ちになった。

「貴様らばかりいい目を見やがって、オレたちをナメるな」

樋口がたたみかける。大鋸が、

「先に着いた者は、あとの者のためにチャンと設営しておくのが礼儀だ。オレたちをどこへ入れるつもりだ」

と割れ鐘のような声でどなった。

中村農夫の気合い

「場所はつくってあるよ、静かにせんかい」

体勢を立て直した依岡が言う。

「バカヤロー、そんなところでいいと思うか」
樋口が目を据えて、ふたたびつかみかかろうとした。これに対して堀川が、
「バカヤローとは何だ」と、眼鏡をはずして前に出る。
「ひとをバカにしやがって、貴様ら出ていけ」
大鋸が竹の棒を振りあげて咆哮した。まさに乱闘寸前の雲行きだった。
多勢に無勢というが、この場合、無勢の地方組が猛者ぞろいなのに対して、中央組はどうみても喧嘩の強そうな者はいなかった。この時、
「無礼者、ヤメたまえ」
という大音声がひびいた。中村農夫の口から発せられたのだ。酒も煙草もたしなまず、若い者の雑談にも加わらず、その存在を忘れられがちだった中村が、額に青筋をたて、仁王立ちになり、射るような目つきで乱入組を睨みすえた。その気合いに樋口、大鋸がのまれた。
これをしおに、加藤松などの中立派が酔漢たちを別棟に連れ戻した。依岡が連絡員を指揮して馳走の皿や毛布を運んだ。

中央と地方の反目

先着組があとから来た者にじゅうぶんの配慮をしていないという不満には、一応の理屈はあった。

しかし、それ以前に、仕事面で不満が鬱積していたのだ。

中心部隊についた東京組には、自動車やトラックがついており、物資の補給もあった。しかし大鋸や樋口組にはなんの補給もなく、悪路の徒歩でロクな食事もできなかった。さらに樋口班には無電がなく、一度、依岡班と行きあった時、樋口が書き溜めた原稿の打電を依頼したが、戦況記事はすでに古く、ニュース価値を失っており、送信されなかった。

入城も中央組より一日遅れ、支局に着いてみると、先着組は車を乗りまわし、取材送信に忙しかった。東京組は陽光を浴び、自分たちには日が当たらなかった。このうっぷんが一気に爆発したのだ。

しかし、この種のいさかいは、同盟だけではなかった。朝日も毎日も、東京組と大阪組の間に反目し合う空気があった。とくに毎日は、大毎（大阪毎日）、東日（東京日日）と、社名呼称でも違いがあった。両社とも大阪には本社意識が強く、東京には中央意識があった。「一番乗り」とか重要ニュースの取り合いや、装備面での優劣が、しばしば争いを招く理由になった。

この夜は無事に済んだが、〝叛乱部隊〟に対する支局長・中村農夫の処置はきびしかった。翌十五日には、大鋸、樋口、小坂らは帰還を申し渡され、上海へ去った。

師団長の気焔

私は、車で城内をまわった。住民居住区は「避難民区」とされ、その周辺には警備隊が配置されて

いた。私たちは、旧支局が区内にあるとの理由で中に入った。まだ店は閉じたままだが、多くの住民が行き交い、娘たちの笑い合う姿があり、子供たちが戯れていた。生活が生き残り、平和が息を吹き返していたのだ。私は戦争で荒れた心が和むのを覚えた。そして、ふと、東京では暮れの仕度で忙しいのではないかと思った。

夜、中島師団長から呼びだしがかかる。行政院に近い中央飯店だった。各社の記者二十名が集まる。私たちが食卓を囲んだのは、家具調度とも豪華な部屋だった。料理は、さすが材料が揃わず一級とはいえなかったが、酒は豊富だった。「今夜は入城祝いだ。大いにやろう」と、中島師団長は老酒の杯を高くあげた。そして滔々とぶつ。

「日本は風呂敷を広げすぎた。これ以上広げてはいけない。今後は杭州、広東などの関門を押さえ、占領地域に独立政権を樹てる。部隊は早く凱旋させて、国費のかさむのを防がねばならない。蔣介石がドイツに泣きついたという話があるが、事実だろう。日本が手を引くべき絶好の時機であることを蔣は知っているからだ。しかし、日本はうかつにドイツの仲介を受け入れてはいけない。ドイツは英国より恐るべき国で、条約など平気で破る。休戦条約は直接蔣と結ぶべきだ。もし戦後工作を失敗したら自分は黙っていない。大砲を持って、どこへでも乗り込んでいく」

戦後に来るものは三国干渉ではないか、と師団長はいう。戦勝の武将の当たるべからざる気焰だった。私は、政府がどのように出先軍団を統御できるのか、不安に思った。